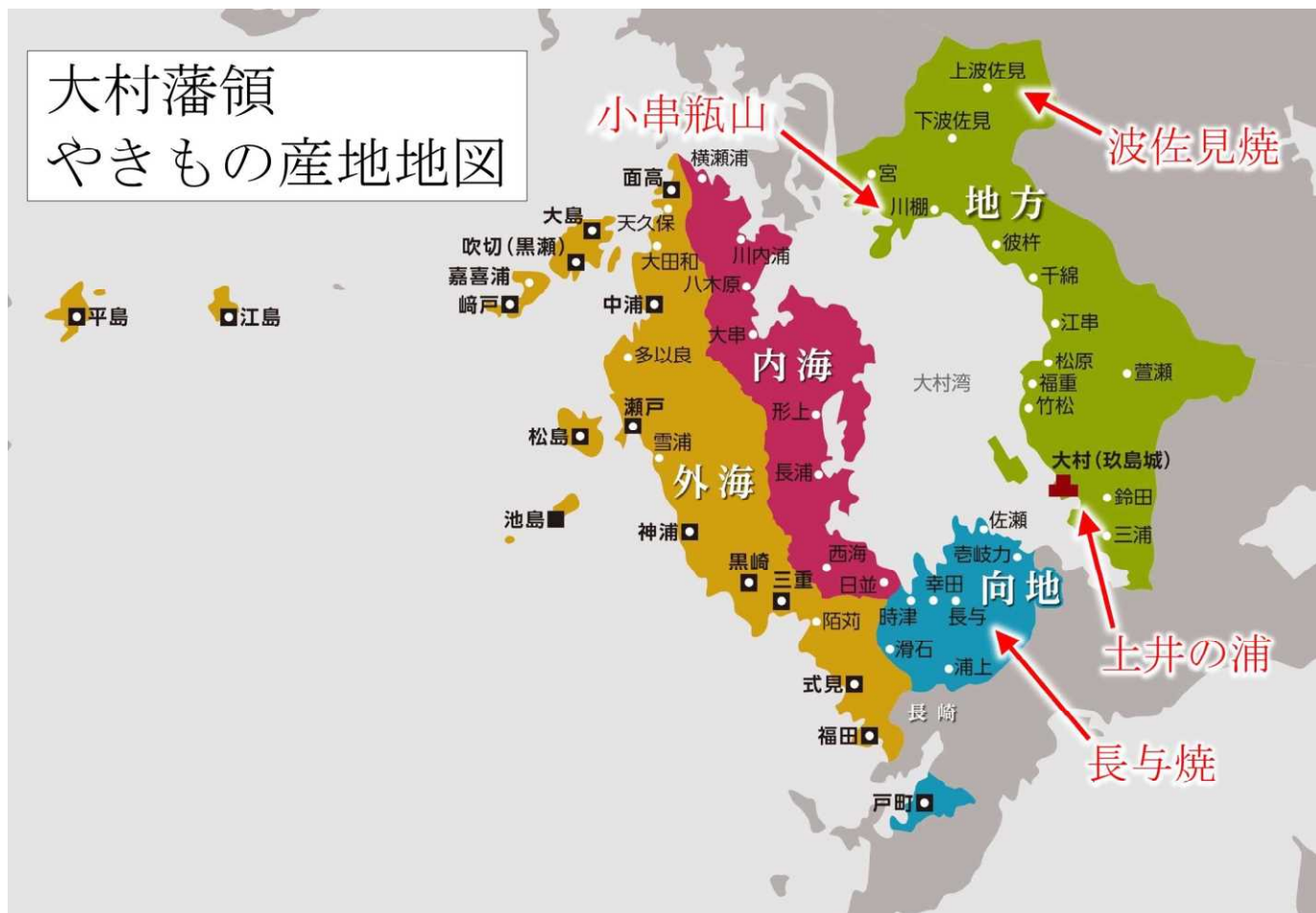


大村藩のやきもの

会場 歴史資料館 企画展示室 期間 令和5年6月17日(土)～7月9日(日) 10:00～18:00
作成 大村市歴史資料館



大村藩のやきもの

江戸時代、各藩は生活の向上や藩財政の強化のため、藩内の産業の振興に努めました。大村藩でも、様々な産業が興され、その一つがやきもの（窯業）でした。

大村藩の総合調査書「郷村記」には、波佐見焼、長与焼のほか、土井の浦（鈴田村）、小串瓶山（川棚村）が「皿山」として記録されています。特に波佐見焼は藩が「皿山役所」を置くなど重要視されていたようで、輸出品を含め多くの生産が行われました。

江戸時代後期には、他藩のやきものではなく、領内のやきものを使うよう藩から郡奉行に指示が出るなど、その存続と育成に力を注いでいたようです。

波佐見焼

波佐見焼の始まりは1590年代頃、陶器の碗や甕などが焼かれたことに起すと考えられます。

その後、大村喜前（のちの初代大村藩主）が参加した文禄・慶長の役の際に連れ帰った朝鮮人陶工が磁器生産を始め、本格的な生産が始まりました。

波佐見が生産地として適していた理由には、陶石や、燃料となる木材の入手ができたこと、運び出す港が近かったことなどの好条件の立地があったため、隣接する有田や三川内とともに一大産地として発展しました。

1630年代からは、肥前地域で磁器生産が活発になり、波佐見では高級な青磁が多く生産されました。1650年代からは、陶磁器の本場中国が内乱や鎖国により輸出を減少させたため、これに代わり肥前陶磁が海外でも求められるようになり、輸出品を多く生産するようになりました。寛文6年（1666）に、藩は皿山役所を設置し、特産品として陶磁器の管理体制を整えています。

しかし、1680年代に中国の内乱が収束に向かい、輸出も再開されたため、再び中国陶磁器の需要が高まったことにより、波佐見焼などは国内向け製品の生産に移っていきます。特に波佐見では、安価な日用の器を生産し「くらわんか碗」として人気を呼びました。

また、江戸時代後期には、醤油や酒を入れて輸出した容器「コンブラ瓶」など特徴的な製品も生産されました。

明治の廃藩に伴い皿山役所は廃止され、藩による大規模な生産は終わりますが、現在でも日用和食器の国内有数の産地として生産を続けています。



波佐見焼青磁染付盃台

制作年代：江戸時代前期 制作地：波佐見（三股窯）
盃台とは盃を載せる器。本品は青磁に染付が施されたもの。
三股青磁窯は、波佐見の中では初期から焼かれた窯で、この三股に藩の皿山役所も置かれていた。



波佐見焼菊花紋青磁大皿

制作年代：江戸時代前期 制作地：波佐見
皿の内側に菊花紋、口縁に唐草をあしらった皿。

波佐見焼青磁輪花中皿

制作年代：江戸時代前期 制作地：波佐見
皿の口縁を花卉状にかたどった皿。





波佐見焼青磁彫文大鉢

制作年代：江戸時代前期～中期 制作地：波佐見（長田山窯）
長田山窯は、江戸期の波佐見の青磁窯の中では終わり頃に位置づけられ、青磁生産の終期の作品と考えられる。



波佐見焼青磁染付洋文字酒瓶(左) 波佐見焼青磁染付洋文字醤油瓶(右) (コンプラ瓶)

制作年代：江戸時代後期～明治初期 制作地：波佐見
コンプラ瓶とは、江戸時代後期に長崎で醤油・酒などを入れてオランダ人に売った瓶で、「JAPANSCH ZAKY」（ジャパニーズ 酒）「JAPANSCH ZOYA」（ジャパニーズ醤油）などが書かれている。コンプラとは、オランダ語で商人を意味するコンブラドールの略である。
右側のものはロシア文字で書かれたもので、ロシア向けにも販売していたことを示す貴重な資料といえる。

○ほか展示資料 波佐見焼青磁深鉢 波佐見焼青磁大鉢

長与焼

江戸時代の一時期のみ長与村（現在の長与町）で生産されていたやきものです。現在は焼かれていません。

長与焼は、江戸前期に始まったとされていますが、その頃にどのような製品を作っていたか分かっていません。一時中断した後、江戸中期に再興した以降は磁器の茶碗や皿、徳利が生産されていたことが分かっています。

長与焼で有名なものに「三彩」があります。磁器三彩で、色鮮やかな発色で評価が高い品です。このほか、^{あめゆう}飴釉（釉薬が褐色を帯びたもの）や、漆手（表面に漆を塗って装飾したもの）など多彩な装飾を施した製品も見られます。

しかし、長与焼は生産された時期や数量が限られ、現在伝えられている品も少なく、「幻のやきもの」とも言われます。



長与三彩詩文皿

制作年代：江戸時代後期 制作地：長与
皿の中央に三彩を施し、周辺部は無釉で漆を塗り金粉を散らし、詩文を入れる詩文皿は長与三彩を代表する逸品。

長与三彩蓋物

制作年代：江戸時代後期 制作地：長与
蓋の上部や蓋と身の口縁部に三彩を施し、主要部には牡丹唐草の染付を施すなど、染付と三彩を併用した





長与三彩 千段巻花生

制作年代：江戸時代後期 制作地：長与

千段巻とは、水平に細かな線を入れたもので、長与の花生には比較的に見られる形状。



長与焼緑釉千段巻筒花生

制作年代：江戸時代後期 制作地：長与
千段巻形状のやや大型の花生。緑釉のみが発色した製品と考えられる。



長与三彩煎茶碗

制作年代：江戸時代後期 制作地：長与
煎茶碗とは、来客用に使われる口元が広い茶碗。
本品は淡い色の発色が特徴。



長与三彩蓋付茶碗

制作年代：江戸時代後期 制作地：長与
表面に三彩を、内面に黄釉を施した器。いずれも発色が良く、
長与三彩の中でも逸品といえる。

○ほか展示資料 長与三彩花生

史料にみる長与焼

長与焼の生産が始まったのは、「郷村記」によると寛文7年(1667)と記録されています。一旦中断の後、正徳2年(1712)に波佐見村から来た太郎兵衛が再興し、文政3年(1820)までの100年間操業しました。その後、幕末の弘化2年(1845)に渡辺作兵衛がまたも再興しますが、その規模は小さかったようです。

三彩については、「郷村記」には「寛政4年(1792)に長与村の市次郎が珍しき焼物を焼く」とあり、「三彩」との直接の記載はありませんが、「珍しき焼物」とは三彩を指すと推測され、この時期に生産が始まったと考えられています。

また、近年天草で紹介された寛政8年(1796)の古文書には、大村領の長与皿山の項に「チャンパン焼物師」の記載があります。「チャンパン」とは当時ベトナム一帯を指す言葉であり、^{こうち}交趾三彩と呼ばれる焼き物の産地として知られていました。この史料からも、長与が三彩を生産していた可能性が高いことがうかがえます。